平成 24・25・26 年度石川県教育委員会指定事業
「いしかわ学びの指針１２か条」推進指定校　平成 24 年度実践報告

学ぶ意欲を育て、自ら考え伝え合う生徒の育成
1年目　～書く活動とその評価を通して～

輪島市立松陵中学校

１　主題設定の理由

情勢がさまざまに変化する不安定な社会の中で，自分の人生を自ら切り拓いていかなければいけない生徒たちに，今「生きる力」が求められている。国際的な学力調査の結果分析等から，平成１９年度に学校教育法の一部改正が行われ，それに伴い，新学習指導要領においても，この「生きる力」を支える確かな学力の要素として「基礎的・基本的な知識・技能の習得」「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成」，「主体的に学習に取り組む態度の育成」が示されている。つまり，知識・技能の習得とのバランスを計りながら，「思考力・判断力・表現力等」を育成することが教育現場における最重要課題となっている。

本校の生徒は真面目な生徒の割合が高く，授業態度や生活態度は落ち着いており，家庭学習に取り組む姿勢も良好である。しかし，規範意識や学習に対する意欲の低さが一部の生徒に見られる。学力においては，基礎基本・活用力ともに定着している生徒がいる一方で，県の平均よりも下の生徒の層が厚く，活用力の弱さが見られる。特に「書く力」において，県との差が見られた。そこで，活用力を高めるための授業づくりと基礎学力を身につけさせるための基盤づくりが必要であると考えられる。

課題に対して生徒が自ら考えを持ち，さらに周囲の考えや新たな気づきなどに反応することで，自分の考えを広げたり，深めたりすることで「いろいろな考え方」を身につけることができると考えている。学習に意欲的に取り組み，自分の考えを持ち，それを伝え合い，自分の考えを確かなものにしながら主体的に学ぼうとする生徒の育成を３年間で段階的に進めていこうと考え，この主題を設定した。

また，自分の考えを伝える前に，考えを整理したり，確認したりする上で「書く活動」を設定することが有効であるととらえ，合わせてその「評価」をしていくことを重点的な取組とした。これらのことから１年目の重点目標を副題として「書く活動とその評価を通して」と設定している。

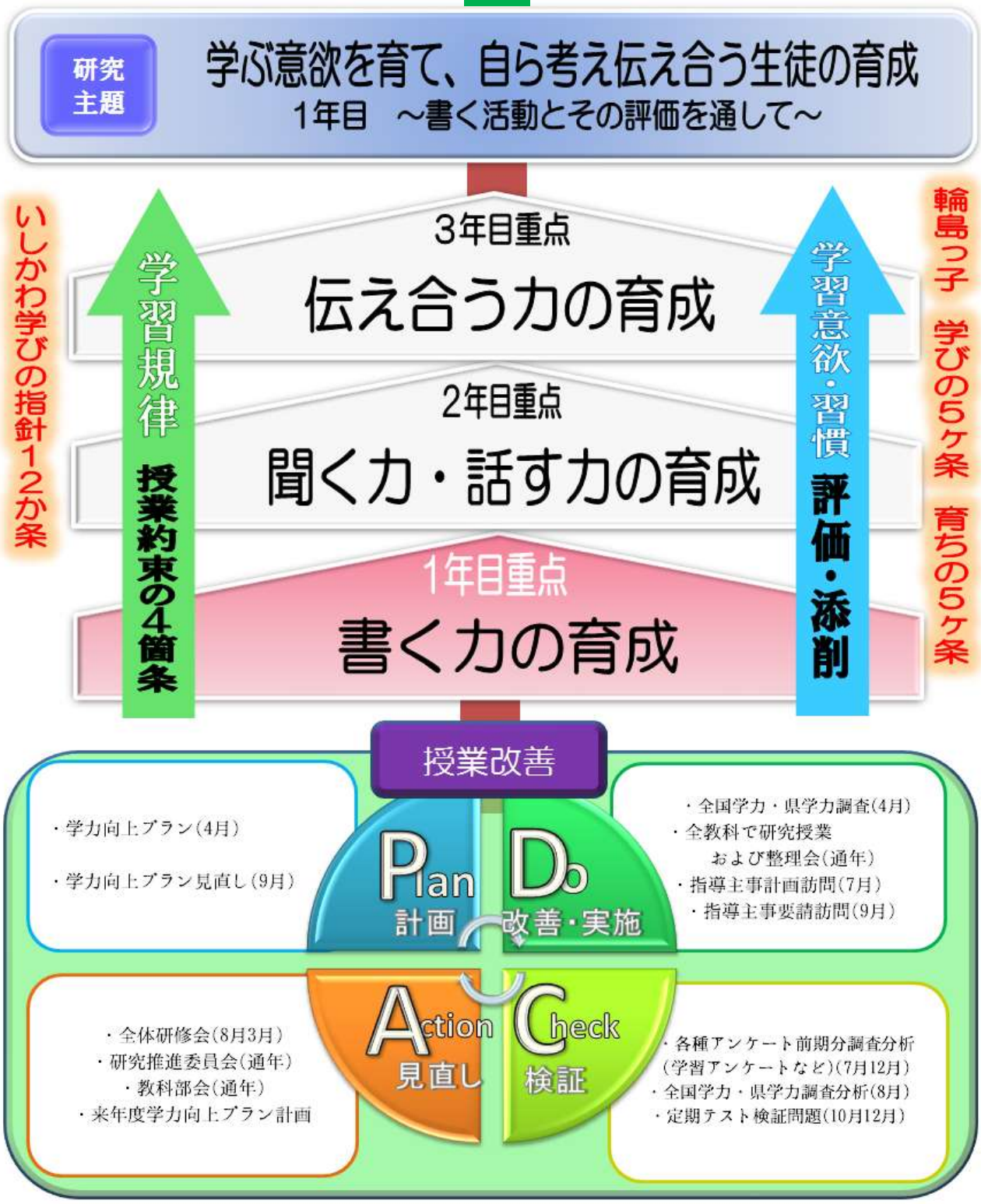
２　研究の経過

昨年度までは学力の向上を図るために「書く活動」と「伝え合う活動」という言語活動を意識した授業や単元の計画を実施・検証してきた。その結果，「書く活動」と生徒の「授業内容の理解」に関連が見られたが，「伝える活動」と「書く活動」の関連がうまく図られず，高い質の学び合いには至らなかった。そこで，いしかわ学びの指針１２か条推進指定事業の初年度である今年度は「書く活動」に研究の重点を置き，「書く活動」を基盤として伝えたり，反応したりできる授業づくりを目指す。また，伝えたり，反応したりするために必要な「話す力」の育成も同時に行っていきたい。教科横断的な活動として，「書く活動」「伝える活動」を積極的に取り入れ，根拠や筋道を明確にして自分の考えを書き，伝えるという言語活動を大切にしながら授業改善・授業実践を行っていく。

3　研究構想図

教育目標

心豊かで、自ら学ぶ意欲を持ち、実践力のある子を育てる



４　具体的な取組

≪１≫課題解決の流れ

全教科共通して，１時間の学習活動を４つの段階に分けてそれぞれ「課題」「書く活動」「伝え合う活動」「まとめ」の場面を設け，生徒に書く力・伝え合う力を育成していくこととした。

①課題設定の工夫

本時のねらいにせまるため，生徒の意欲を喚起し，主体的に考えたくなるような課題づくりに心がける。板書やノート等を利用して，課題を明示することと，授業の見通しが持てるような課題であることにも配慮する。

・資料提示や既習事項の振り返りなど，前時までの学習内容とつながりのあるもの
・身の回りにある実物や現象を利用するなど身近な題材を利用したもの
・課題を精選・焦点化することで，解決の見通しが立てやすいもの

そのための導入として

・全員で問題文の読み取りをしっかり押さえて，課題につなげる
・視聴覚教材や絵・図などを利用することで，生徒の五感に訴えイメージを持ちやすくする。

②書く活動の工夫（書く活動・まとめ）

○自分の考えを書く活動

「課題に対して自分の考えを持ち，その考えを書く」という活動である。 ここでは，教師の指導として自分の考えを整理しながら書かせるための手立てが必要であると考えた。例えば，考えを段階的に示すなどのワークシートの構成,図や絵を利用することでわかりやすくするなどの工夫であったり，どのように書けばよいのか，評価の視点を伝えておくことが考えられる。 このことを基本に，教科ごとで「書く活動」の工夫を考え，実践することとした。

○まとめ（書く活動）

まとめの場面では自分で考えたことや見つけた根拠，友達の意見を聞いて新しくわかったことなどを書く活動である。ここでは，生徒の言葉でまとめさせることや根拠・筋道を明確に書くこと，課題に対応したまとめとなるように指導する。また，②の書く活動で示された評価の視点をふまえながら書かせるように指導する。

教科	書く活動・指導の工夫（意識して取り組んでいること）
国語	・キーワードの提示。 ・型を示す。（板書やノート・ワークシートの工夫） ・根拠を明確にして書く。 ・気付いたことや発見したこと,自分の考えになかった友達の意見などを書くスペースを設ける。
数学	・考えが書きやすくなるような課題を提示する。 ・わかりやすく（理由や筋道が通った）書かせる。 ・ノートチェックと評価 ・まとめの穴埋めやキーワードの提示。

社会	・課題の提示 ・キーワードの提示や空欄に語句を入れるなどで重要語句を使い，まとめる。 ・考察・まとめでは「理由・根拠」・「立場」を明確にして書かせる。 ・地図や統計などの資料から必要な情報を集め読み取るために数値の指導などを行う。 ・グラフなどを実際に書かせる。
理科	・予想でも，できるだけ「考えた理由」を明確にして書かせる。 ・考察・まとめでは，必ず「考えた理由」をもとに書かせる。 ・キーワード（科学的用語）を示して，考察の中に必ず使うように指示する。 ・基本的に課題⇒予想⇒実験⇒結果⇒考察・まとめの流れにそって考えさせていく。 ・発言できなかったけど気付いたことや発見したこと，自分の考えになかった友達の意見などを書くスペースを設ける。
英語	・日記や紹介文など長めの英文を書く際には，例文をもとに構成を考えさせ，その構成にしたがって書かせる。 ・意欲向上させるために，発表者にはごほうびシールを与えたり，活動をゲーム形式にさせたり，班対抗にさせたりする。積極的に視聴覚教材を利用し，興味関心を抱かせるようにする。 ・書く力をつけるために，英語はまず単語（語彙）力であるので，単元ごとに単語テストを行い，満点をとった生徒の名前を掲示，不合格者は再テストを行う。 ・家庭学習のやり方を冊子にして配布し，話をした。毎週４ページ以上ｅノートをして提出させ，チェックしている。きちんとできていない場合は再提出させている。
美術	・自分の考えを盛り込める題材を提示するように心がけている。 ・アイディアスケッチの段階での練り直しを求める。（安易に合格させない）
体育	・チームプレイでは，チームの課題を克服するための練習方法などを考えさせる。また，陸上では，目標設定を行い，達成できた理由やできなかった理由等を書いて考えさせる。 ・振り返りでは，今日の課題について運動のポイントを見つけたり，友達の良い所を書く習慣をつける。
音楽	・音楽に対するイメージや思いを音楽言葉辞典やキーワード（音楽的用語）を示して，その中から選んで書く。 ・課題→イメージをつかむ→表現の工夫→聞き合う→まとめの順番の流れをそって進める。 ・グループやパートで演奏していく中でイメージや思いを出し合い，創意工夫に活かしていく。

全教科でそれぞれの取組を共有し，自分の教科でも利用できそうな実践を積極的に進めていくこととした。例えば，「キーワードを示す」「例文や文型を提示する」など。これは，その教科で用いられる教科の用語や表現の仕方を示し，教科の特性に合わせた文章で書く練習をするということになる。「課題解決の流れにそったわかりやすい板書づくりをする」ことで，課題に対する解決の方法・考え方を身につけさせることにつながると考えた。また，ノート指導として，メモ欄を設定するなどの工夫をしている教科もある。

評価の視点として，「必ず根拠・理由を入れること」や「わかりやすく筋道を通して書くこと」など根拠・筋道を明確にして書くという視点を持たせることを共通の取組とした。

③伝え合う活動の工夫

書いた考えをもとにして，それを伝える・伝え合う活動につなげる活動である。これは新しい考えや違う考えを共有し，思考を深めさせる大切な場面である。

・求める結果を明確にし，発表する内容をまとめさせておく。
・事前に使えそうな表現を提示しておき，反応しやすくする。
・自分の考えと他人の考えを比較しながら聞かせ，考えが異なる場合は質問するようにさせる。
・学習形態を工夫する。個→ペア→小集団→全体の流れで進める。

④評価・添削

課題に対する自分の考えや授業の終わりにまとめたものを評価する。この際，評価の視点を明確にした生徒自身による自己評価や相互評価を取り入れる。この活動によって，どのような書き方が良い書き方なのか，生徒の自覚を高めることとなる。また，教師が評価を行う際には，生徒に与えた評価の視点を意識しながら，添削することとした。また，書けている部分を積極的にほめたり，良いものは教室に掲示するなど，継続的に指導し，生徒自身が書けるようになってきたという実感を伴いながら，考える意欲につながるようにした。

・理由・根拠や筋道を明確にして，キーワードを用い，考えが提示した文型を参考に書けているか評価し，足りない表現や言葉があれば添削をする。
・単なるランク付けではなく，観点をしぼって添削し，次回以降につながるアドバイスを加える。

≪２≫学習規律の取組

授業に取り組む姿勢として，意識させたいきまりを重点的に４つ設けた。授業で使う教室に掲示し，必ず守るルールとして徹底し，継続的な指導を進めてきている。また，生徒だけでなく，教師が良い手本となるように意識している。

≪３≫家庭学習の充実

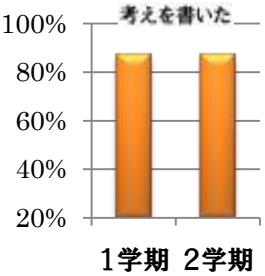
家庭における日々の課題は，基礎的基本的な内容を定着させる上で重要な要素である。本校では，１学期，１，２年生は自主勉強ノート，３年生は問題集に取り組ませてきた。自主勉強ノートの内容は，その日の授業の復習や問題集で間違えたところの確認など生徒が自分で考え，自主的に内容を決めるものだった。これを２学期以降，授業につながる課題を通して，より基本的な事項を定着させることを目的として，その日あるいはその週の授業につながるような教科ごとの課題を提示し，自主勉強ノートに間違えた問題を書くという取組に変えてきている。

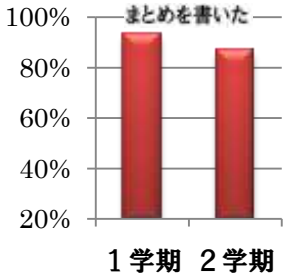
≪４≫検証について

生徒の変容を確認するための取組として，学期ごとに生徒対象の学習アンケートを行った。また，国語，数学，理科，社会の各教科については，２学期の２回の定期テストにおいて，活用力を診断する目的で根拠・理由を明確にして考えを問う設問・大問を設定した。なお，問題の内容や形式は，ほぼ同じものとした。中間テストの分析結果をふまえ，各教科で不十分な点を明確にし，期末テストまでの期間で指導を充実させ，期末テストの結果と比較・検証した。

〈生徒対象の学習アンケートの比較〉

１学期に比べて，肯定的な評価が低下しているが，多くの生徒は自分の考えを書くことができている。さらに適切な根拠をもとにして書いたり，教科の特性に応じた書き方ができるように継続した指導が必要である。また，評価や添削指導の場面をくり返し行うことで，適切な言葉でまとめられるようになったという実感を持たせる指導の徹底も必要である。





〈活用力を問う問題の通過率の比較〉

	正答率		準正答率		誤答率		無回答率	
	中間	期末	中間	期末	中間	期末	中間	期末
国　語	21%	46%	30%	21%	33%	24%	17%	9%
理　科	23%	28%	21%	18%	38%	42%	17%	12%
社　会	38%	38%	22%	12%	22%	16%	18%	26%
数　学	28%	20%	25%	32%	16%	22%	31%	26%

国語…根拠を意識して文章を書くことができるようになってきた。また，条件に応じた文章を書く学習も行い，文章を書くことへの抵抗感を減らした。

理科…根拠をもとにして正しい文章が書ける生徒が増えている。また，書き方がわかるようになってきている。そのことが，無解答率の低下につながってきている。

社会…用語の意味をとらえ，根拠として活用したり，根拠を多面的にとらえる生徒が増えてきている。３年生では，ディベート活動などで「根拠」や「筋道」を明確にして説明できるようになってきている。しかし，資料を活用したり，既習事項を根拠とすることが不十分である。

数学…数学的な根拠をもとに，求め方を示すことができてきている。計算の過程を説明させたり，その根拠を問うことにより理解が深まったと思われる。

5　成果と課題

≪成果≫

・自分の考えを抵抗なく発言することができるようになっている。 また，数学においては計算の途中をていねいに書くことができるようになってきており，計算ミスが減った。

・考えのもととなる根拠や理由を具体的に書ける生徒が増えてきており，教科の用語を用いて，その教科に応じた文章が書けるようになってきている。

・家庭学習の課題への取り組みを変えたことで授業につながる宿題となり，内容の質が高まり，基本的な内容の定着につながってきている。

≪課題≫

・相手を意識して，わかりやすく伝える文章を書くことは不十分であることから，考えを書く段階から，相手に伝わりやすい表現や適切な言葉を抜かさず書くという意識を持たせる指導を継続していく必要がある。今後も何を根拠とすればよいか繰り返し指導していく必要がある

・根拠や理由をもとに書いていても，根拠に対する認識を誤っているなど，根拠の取り出し方に甘さが見られる。

・定期試験での比較は，問題の形式を揃えて行った。しかし，設定した設問まで時間内に辿り着けず，無回答になっている状況も見られた。小テストや単元テストを利用し，時間を確保しながら，こまめに評価していく必要がある。

・課題提示の変更が家庭学習時間の増加にはつながらなかった。宿題への前向きな評価や添削指導をくり返すことで生徒に，できる実感や自信を持たせ，学習に気持ちを向かせる。

・授業改善のための PDCA サイクルにおいて，長期サイクルという視点ではうまく機能させることができていたが，短期サイクルという視点では，機能している部分とそうでない部分があり，短期サイクルの進め方を見直していく必要がある。